

第 11 号(2009.04.28 配信)

今回は「昭和」の話です。毎年4月29日の休日「みどりの日」が「昭和の日」に変わったのは2007年でした。今年がまだ3年目ですから最新の祝日です。その趣旨は「激動の日々を経て復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いをいたす」ことだそうです。呼び慣れた「みどりの日」は消えたかという、どっこい生きています。憲法記念日と子どもの日に挟まれた5月4日が、新「みどりの日」です。

64年続いた「昭和」ですから、一回にすべてを述べるには難があります。今回は前編にとどめ、いずれ後編に続けたいと思います。

ところで中村草田男(なかむら・くさたお)という俳人をご存知ですか？ 昭和58年(1983)まで存命でしたから名前は聞いたことがおありかも知れません。彼の句「降る雪や 明治は遠くなりけり」は有名です。それなら知っている、という方もあるでしょう。サロン・レターをお読みの皆さんはほとんどが昭和生れのはず。「明治」なんてはるか遠い昔。祖父か祖母から聞いたかな？「昭和」の話だというのに何をいまさら「明治」か？と言われそうですが...

そのわけを言いますと、この句が詠まれたのは、昭和6年(1931)でした。計算すると、明治が終わって19年後です。今は平成21年。昭和が終わってから2年も余計に経っています。「昭和は遠くなりけり」と言われても仕方がないかもしれません。

草田男の上記の句について聞いた話。昔の小学校を訪ねたときの感慨を詠んだ句だそうです。一つの句に「や」「けり」「かな」などが二つ以上あってはいけないといわれているのに、この句ではそれが許され、しかも名句になっているのはなぜか？「明治は遠くなりけり」というフレーズがすでにあって、それに初めの5文字を付けたのではないかとの説もある由。「昭和は遠くなりけり」と言われたら、上の句をどう考えて仕立てますか？

その「昭和」。1926年から1989年まで64年を数えました。日本の年号では最長です。天皇の在位としても最長ではなかったか。出典というか由来というか、「昭和」のいわれを調べてみました。儒教の書経堯典「百姓昭明、協和萬邦(百姓昭明にして、萬邦を協和す)」から2文字を選んだとのこと。初めて知りました。皆さんも初耳でしたか？

国語辞典から簡潔に注記すると、「書経」は「中国の經典。五經の一つ。堯(ぎょう)・舜(しゅん)から周にいたる政治史・政教を記したものとあります。

その意味は？ 人々はすべて聡明で、世界各国が平和に仲良く助け合うこと。果たしてその願いは通じたでしょうか。「昭和」は遠くなったか「近過去」か、それぞれご自分の感想をお持ちでしょうが、20年余を経過した今日、私たちに共通する国際協力に関連しながら「昭和」をたどってみたいと思います。実感が遠かろうと近かろうと、冒頭の趣旨にもあったように、日本が歴史上、大きく変化した激動の64年！ 将来にわたって忘れてはならない時代です。

昨年来のアメリカを震源とする経済大不況は「百年に一度あるかないかの経済危機」と、いわれます。その「百年に一度」の始まりが、昭和4年(1929)です。やはりアメリカ発の「世界経済恐慌」で、「暗黒の木曜日」と呼ばれた株式大暴落がキッカケでした。昭和は大恐慌で始まったとさえいえそうです。暗い時代がやってきます。

国内でも、近隣諸国との関係でも、次ぎつぎに大事件が起きます。主な事件だけでも年代風に列記してみますと：

- 昭和 3 年(1928) 関東軍(旧日本陸軍の中国東北部駐留軍)が中国軍閥・張作霖を爆殺
- 同 6 年(1931) 満州事変起こる
- 同 7 年(1932) 5・15 事件起こる(犬養毅首相暗殺)；上海事変起こる
- 同 11 年(1936) 2・26 事件起こる(斎藤実内大臣、高橋是清蔵相ら暗殺)
- 同 12 年(1937) 盧溝橋事件 日支事変(日中戦争)勃発
- 同 16 年(1941) 太平洋戦争開戦(当時は「大東亜戦争」と呼ばれていた)
- 同 20 年(1945) 同 終戦(「ポツダム宣言」を受諾し無条件降伏 = 後述)

ここで一区切りします。「昭和」の初めの 20 年は「戦前・戦中時代」。満州事変から数えれば「15 年戦争」がやっと終わりました。この 20 年を一応「昭和前期」として、戦後の時代と区分しておきます。

私は歴史家でも研究者でもないの上記の諸事件・事変の内容や詳細は省略しますが、国際協力に長年たずさわり、今もその視点で世界情勢や国際関係を見たり考えたりする立場からすると、昭和前期の日本は「暗黒の時代」でした。軍国主義の高まりとアジアでの支配権拡大の一方で、クーデター、政府首脳・要人暗殺が繰り返され、いまさらながら、よくも異常な時代が続いたものだとの思いを新たにします。

同時に、戦争末期の 20 年 3 月には、東京大空襲で一夜に約 10 万人が焼死し、8 月には広島と長崎に史上初の原子爆弾が投下されて大惨害をもたらし、今なお原爆症で苦しむ多数の被災者があることを忘れることはできません。

太平洋戦争の結末は「終戦」と言うソフトですんなりした言葉で語られますが、史実は、米英中ソ(旧ソ連)の首脳による「ポツダム宣言」を日本が受け入れて「無条件降伏」した「敗戦」でした。よく「自虐史観」という言葉を聞きますが、史実は否定できません。その結果として、韓国と「北朝鮮」とが独立し、台湾が中国に復帰し、千島と樺太南部が旧ソ連領に変わりました。現代の日本がかかわる、特に東南・東北アジアの、様々な国際関係、国際問題は、この日本の「敗戦」に起点があります。

暗い話ばかりでウンザリでしょうが、現代につながる話に目を向けると、ごく最近、画期的なニュースが報じられました。オバマ新大統領が、超大国の首脳として初めて「核のない世界をめざす」と発言したこと。すでに大統領選の公約に掲げ、その意味では新味はないといえなくもないけれど、現職としての意思表示ですから重みが違います。

4 月 5 日にチェコのプラハでの演説で「核兵器を使用した唯一の核保有国として、アメリカには行動すべき道義的責任がある」と述べました。今の国際政治環境を考えると「核廃絶」に一挙に進むとはいえませんが、幾多の経過と課題を消化しながら前進する端緒になると考えます。折からテポドン発射騒動の最中でしたが、日本の政治家の中に「日本も核保有を」との発言があったと聞き、時代感覚の違いを痛感しました。この話は、オバマ政権の現況や見方を含め、「昭和」の話の「後編」にいずれ記すことにします。

(4 月 24 日記。国際サブロー)